

都市における子ども・若者の社会的孤立と居場所・つながりへの支援
—世田谷区立児童館・青少年交流センター職員への
記述式アンケートを手がかりに—

Prevention of Social Isolation and Support of Connections for Children and Young People
in Cities

Based on a Written Questionnaire to Setagaya Children's Center and Youth Center Staff

キーワード：『自由時間』『余暇活動』『潜在的な孤立リスク』『ユニバーサルアプローチ』
『20代半ばから30代の孤立』

萩原 建次郎

HAGIWARA, Kenjiro

(駒澤大学総合教育研究部教職課程部門 教授)

1. はじめに

1.1 本稿の目的

本稿は、今回の特集テーマを受け、子ども・若者の社会的な孤立をめぐり、①世田谷区内の子ども・若者の成育環境の変化や特徴をとらえ、②子ども・若者支援がいかに取り組みられているのか、その意義や課題は何かを明らかにすることを目的としている。

そこで今回、区内全25か所の児童館と全3か所の青少年交流センター職員の協力の元、乳幼児親子から子ども・若者の育ちや孤立をめぐり記述式アンケート調査を実施した。

なお、区民同士のかかわりの希薄化と孤立化をめぐっての実態はすでに区の調査によって数量的に明らかとなっている(金澤, 2023)。そこで本稿では数量的に見えてきた事実の背後にはなにがあるのか、アンケートに寄せられた記述内容を元に、子ども・若者の育ちの具体的な状況や家庭・職場以外の居場所の状況、身近な人間関係をめぐり特徴などについても、質的な側面で明らかにすることを試みる。

1.2 子ども・若者の孤立の意味をめぐって

本稿では、「孤立」を子ども・若者の生きづらさをめぐりさまざまな課題(自殺、貧困、精神的な疾患など)と深く結びついた重要なリスク要因としてとらえる。孤立が彼ら彼女らの生きづらさと深く結びつき、上記のような問題を引き寄せやすく、あるいはある困難な状況が孤立を招き、対応を怠れば当事者の意思とは異なる次元でより深刻な状況を招く。そのようなリスクな要因として孤立をとらえている。

例えば子ども・若者の貧困のように、本人が望んでそうになっているわけではなく、親や保護者の不安定な就労環境に起因する離職や精神疾患、育児放棄といった外部的な要因で否

応もなく巻き込まれ、あらゆる社会関係から隔離・断絶されるような状況をさしている²⁾。ハイリスクな孤立状況の中には、本人でさえ困っているという認識も持ちえない、さまざまな困難が複合して言語化ができない、その意欲さえもちないといった事態も含まれる。一見してある若者が社会関係からの隔絶を自己選択しているようにみえて、自己責任主義の社会風潮の中で、すべてを自罰的に受け止め、助けを求める思考自体を持ちえず、外部にSOSを出すこと自体を知らないといった状況の中で生じている隔絶状況も孤立としてとらえる³⁾。

とりわけ乳幼児や低年齢の子どもたちにおいては、より一層周囲の大人や成育環境に影響を受けやすく、当事者の選択的行動の範囲も相当に限定されているため、子どもの孤立は喫緊の課題として大人・社会が積極的に関心を寄せ、いかなる支援や方策が必要なのか議論すべき問題である⁴⁾。このような孤立状態や状況を、本稿では「社会的孤立」という言葉で仮止めして用いることとする。

2. 世田谷区における青少年育成・若者支援体制

まずは乳幼児親子から子ども・若者年代に対して、世田谷区ではどのような対応がなされているのか、その施策の全体を概観してみたい。図1にあるように国の施策体系（子ども・若者育成支援推進大綱）において、「子ども」は0歳から18歳未満、「青少年」は0歳から30歳未満、「若者」は12歳から40歳未満として規定されている。世田谷区でもそれにならひ、最大幅の0歳から40歳未満までを子ども・若者として施策の対象としている。

先に述べておくと、都市部を中心にユースセンター（青少年活動・交流施設）を展開している自治体は多いが、その多くは中高生年代から20代までであり、その先の年代は就労支援を主な目的とする地域若者サポートステーションにゆだねている。そうした状況にあつて、世田谷区では40歳未満までをユースセンター（世田谷区の場合「青少年交流センター」と呼ぶ）利用の対象としていることは、見落とされがちだが本稿のテーマと深く結びつく特筆すべき点となっている。

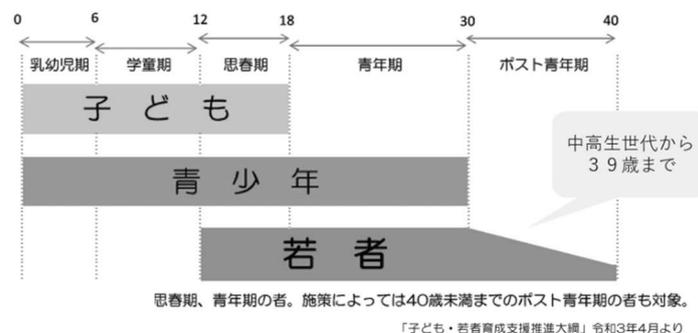


図1 世田谷区の子ども・若者支援の対象年齢と区分を示した図

出典) 世田谷区子ども・若者部子ども・若者支援課による提供

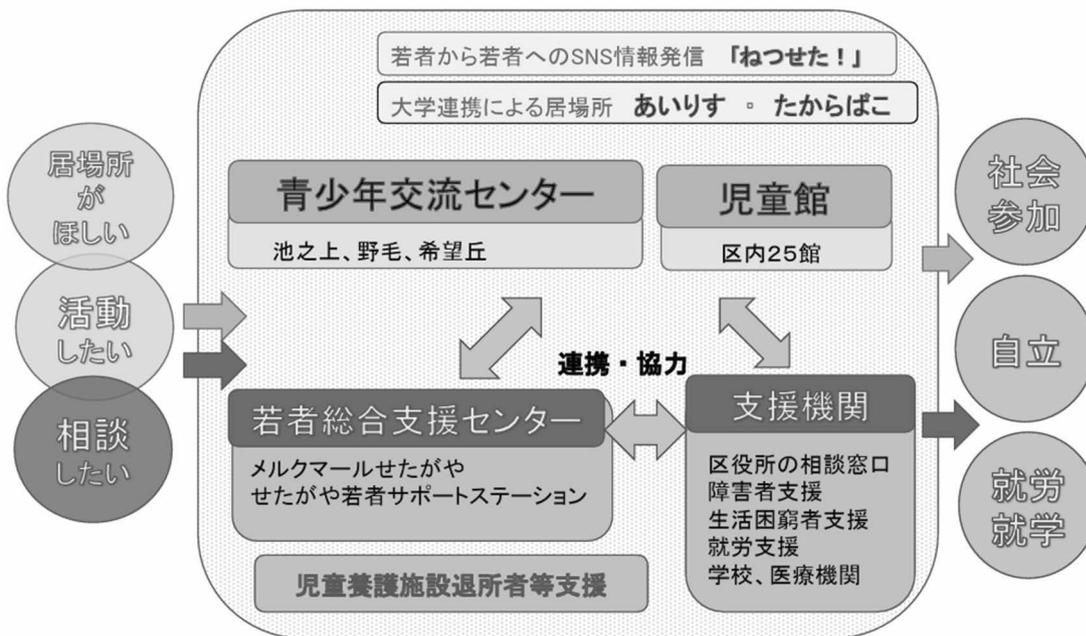


図2 世田谷区子ども・若者支援体制の概念図

出典) 世田谷区子ども・若者部子ども・若者支援課による提供

さて図2に従いながら、世田谷区の子ども・若者支援体制を概観しておく。区では施策全体として、主に0歳から40歳未満の乳幼児親子も含む子ども・若者の多様なニーズへの支援を展開している。図2の左側には、広く「居場所が欲しい」「活動がしたい」「相談したい」というニーズに対応する形で、児童館（25館）、青少年交流センター（3センター）、若者総合支援センター（1センター）を設置している。それら3種類の施設を区の各関連部署が連携協力支援する形になっている。子ども・若者がこれらの支援施設・機関を活用して、「社会参加」「自立」「就労」（図2右側）の状態となることが施策全体の目標として示されている。では、これら施設・機関についてももう少し詳しくみてみよう。

児童館は主に0歳から18歳未満の子どもを対象としており、そこには乳幼児親子も含まれる。また世田谷区では25館あるなかで、5館を中高生支援館として位置付けて、中高生に対して力点を置いた取り組みも行っている。制度としては児童福祉施設として、児童福祉法によって設置されている施設である。職員は主に保育士資格を有するが、自治体によっては中高校教員資格や社会教育主事任用資格など、学校教育・社会教育に関連する有資格者を採用するところもある。

青少年交流センターは3センターあり、主に12歳（中高生）から40歳未満までの若者を対象としている。制度としては世田谷区の条例で定められており、職員の資格要件はとくに定められてはいないが、青少年・若者支援の専門職としてユースワーカーが勤務している⁵⁾。

若者支援総合センターは、若者就労支援を主とする「せたがや若者サポートステーション」、ひきこもりや生きづらさを抱える若者への支援を主とする「メルクマールせたがや」

を合わせた総称となっている。なお、せたがや若者サポートステーションは厚生労働省管轄の事業のため、利用対象は15歳から49歳までとなっている⁶⁾。

世田谷区では独自に青少年交流センターと若者支援総合センターが連携・協働する形で若者の就労体験・支援事業も展開している。3つの青少年交流センターの共通事業として「P-work」があり、各センターの持ち味を生かしたプログラムを展開している⁷⁾。それゆえ、世田谷区のユースセンター（青少年交流センター）の場合、「ひきこもりや生きづらさを抱える若者」と「学校・大学に通ったり働いていて元気そうに見える若者」とに分けることなく、ユニバーサルに利活用できる施設となっている点も特筆すべき点である。

以上の事業・施策を統括的にかかわる担当部局が、世田谷区子ども・若者部になる。児童館は同部内の児童課が、青少年交流センターと若者支援総合センターは子ども・若者支援課が所管する。その他、図2上部にある若者による若者へのSNS情報発信「ねつせた」や大学連携による子ども・若者の居場所「たからばこ」「あいらす」、児童養護施設退所者支援なども展開している。

3. 児童館・青少年交流センター職員から見える子ども・若者の育ちの現状と課題

以上の支援体制のなかで、今回のアンケート調査は、日常的に子ども・若者が立ち寄る児童館、青少年交流センターの職員に協力いただいた形になる。回答は区内25か所の児童館153人の職員中48件、3か所の青少年交流センター30人の職員中30件が寄せられた。

なお、本調査の記述形式はあくまで各職員が「感じていること」「思うこと」がベースとなった主観的記述である。ただし、ここでの「主観性」というのは、日頃から青少年育成・若者支援にかかわる専門職者によるものであり⁸⁾、そこで発揮されている主観性は、専門的な知識と実践経験の積み重ねによって「鍛えられた主観(disciplined subjectivity)」であることを断っておきたい(萩原, 2004: 76-82)。それは常日頃から直接子ども・若者とかわっている児童館、青少年交流センター職員だからこそ、客観的な数量データではとらえにくい、子ども・若者の潜在的なニーズや生の在り様を直観的に、よりの確につかんでいるということの意味している。もちろん、そこから得られる知見は絶対化されることではないが、今回のアンケートの回答内容は、そのような意味と価値を帯びた記述として扱われるべきものとして先に述べておきたい⁹⁾。

ではここからは、児童館と青少年交流センター職員から見える子ども・若者の育ちの現状と課題について、アンケートへの記述内容から読み解いてみたい。

3.1 乳幼児親子-子育てサークルの減少と親同士のつながりへのニーズ

まずは乳幼児親子の利用状況はどうであろうか。とりわけ乳幼児親子の孤立や、仲間探しとつながりへのニーズをめぐっては児童館職員48人中28人、約6割が言及している¹⁰⁾。

主な回答内容を抜粋した下記の表からそのエッセンスを抽出すると、①子育ての疲れ

(4,7,20,21)、②家での孤立した子育て(5, 7, 10, 20)、③相談相手がいないことの不安と閉塞感(8,9,10,11,14,16)、③地域のつながりと子育てサークルの減少(3,11,12,13,17)、④同世代の子育て親子の仲間さがし(1,2,3,6,15)といった記述が多い(カッコ内は回答番号)。ここから見えてくるのは、地域コミュニティにつながるルートとしての子育てサークルの減少があり、より一層、家での孤立した子育て状況を生み出している可能性が高いこと、相談相手もいなく、どこに行けばよいのか困った状況の中で、同じ仲間を探しに児童館に来る乳幼児親子が多くみられることである。それは区の調査から見た、区民の地域つながりの希薄化傾向というものが、子育て中の親子にどのような影響を及ぼしているのか、その内実が上記の形で浮き彫りになったともいえる。

ただし、このような状況は因果関係の無限ループを含んでいる。そもそも乳幼児を育てている親・保護者自身が早期の仕事復帰を目指し、子どもを早くどこかに預けることに意識が向いていることが顕著である(3,4,10,11,12,15,16,17,20)。そうなれば、平日日中に子育て仲間と集まりにくく、サークルも立ち上げにくくなる。それは多様な地域活動とのつながりのきっかけを得にくくなることでもある。他方、専業主婦・主夫や仕事復帰前の親・保護者にとっては、同じ育児仲間を身近に見つけにくくなることでもある。わが子が1歳になる段階で仕事復帰をする親・保護者も多い中では、より一層乳幼児親子が孤立化しやすい社会環境にあるともいえる。

表1 乳幼児親子とのかかわりで感じると思うこと(抜粋)
回答：児童館職員(強調箇所は筆者による)

1	同年代親子での繋がりを求めている。お買い物情報やおすすめの保育園など地域の情報共有の場として利用する姿が見られる。
2	子育てひろばではなかなか外に行けず勇気を出して児童館へ来館したという方が多い。そこでお母さん同士の交流が生まれて繋がりができているので、家の中でお子さんと二人きりで気持ちが煮詰まってしまっている子育て中の乳幼児親子にぜひ児童館へ足を運んでもらいたいと思う。
3	同世代の子を育てる仲間や繋がりを求めているように感じる。子どもが1歳に上がるタイミングで仕事復帰する家庭が多い印象を受ける。そのため、1・2歳児ひろば、サークルの参加者が年々減少している。
4	子育てを楽しんでいそうな方もいるが、疲れて見える方もいる。後者はお子さんの発達面で不安を感じていたり、親自身が何かしらの問題を抱えているケースが多いのかなと感じる。乳児の親は子どもが1歳をすぎると仕事復帰する人が多い印象がある。
5	子育て家庭の孤立感、必要な情報へのアクセスの不便さ、頼ることに対するネガティブイメージ
6	人との関りを求めて来館される方が多い気がする。子どもが泣いていると泣き止ませようと必死になる保護者が多いが、児童館では泣きたいだけ子どもが泣いても気を使わない、自由に過ごせる場所であってほしいと思う。
7	本当に初めて来る方の中で、「家族以外と話したい」「子どもと二人きりだと苦しい時がある」という悩みを漏らす人がいて、それを伝えてくれる人がいて力になりたいと思う反面、それすらも伝えられえずに家にいて、児童館に行かずに過ごす人もいるんだろうなあと思う。
8	相談相手のいない中で不安を抱えている保護者が多い。
9	初めての育児で、不安や閉塞感に共に情報が氾濫しており、「大丈夫」を確認したい

	思いを多々感じる。
10	学童期以降の要保護児童や気になる子どもの保護者が乳幼児期に児童館を利用したりしているケースがほぼない。そういう家庭ほど子育て仲間もおらず、家で孤立して子育てをしている。もしくは就労している実態を感じる。
11	子育てサークルや幼児ひろばの参加者が年々減少していることから、働く保護者が増えていることを実感する。逆に土日の幼児親子の利用がとても多い。0歳児の保護者は周りに話し相手がない人が多い。
12	コロナ禍後、仕事復帰される方が増えているように感じる。0歳児親子対象のひろばは毎回多くの参加があるが、2～3歳児対象のサークルはどこも児童館も減少している。産休・育休がとりやすくなったことはよいことだが乳幼児期から親と触れ合う機会が減少していると感じる。土日の乳幼児の利用は多く、特に午前中は父親と乳幼児が来館することが増え、父親の育児支援事業の参加も増えてきている。
13	この頃は、保育園や子育てひろばやおでかけひろば多くなってきたことで、サークルの参加者がかなり減ってきている。プレサークル(外遊び)は、おでかけひろばに参加していた子が別れて参加している。
14	コロナ禍の中で出産や育児をしているため経験のある子育て先輩ママに聞いたりすることや同年代のママとも情報共有ができないため手探りで不安な気持ちを抱えている。
15	保護者が就労前の時間を過ごすために、イベントを選んで利用している。これまでの地域での子育てや地域のつながりを求めて利用する人が減っている。
16	仕事への復帰などで家でゆっくり子育てを楽しむ時間が短くなっていると感じる。イベントには参加するが交流には参加しないという方もおり、地域でのつながりをつくることより、習い事のようにサービスを受けることを重視される方もいる。一方で、家族以外で話す人がいないので、児童館で色々な人と話せて満足といった方もおり、コミュニティの希薄化を感じる。
17	職場復帰する家庭・保育園入園家庭が増えている。児童館で大切にしている地域で子どもを見守るためのサークル活動の人数が減っている。
18	子どもと関わったことが少ない保護者が多いように感じる。土曜日は父子での児童館利用も多いが、母子のときほど周囲との交流はない。保護者が好きなプログラムにだけ参加するなど、子どものためというよりは保護者のために利用する姿も見られる。
19	乳幼児期の習い事をする、もしくは希望する方が多い。 保育園や幼稚園に入園するまで子どもとどう過ごすかを深く考えている傾向とともに、家で子どもとふたりきりになってどう遊んだらよいのか迷う方がいるのを感じる。
20	保育園に子どもを預けている保護者は、仕事の忙しさ等はあるものの、子どもから離れる時間が多く、精神的なゆとりがある人が多い。一方預けていない保護者には、一日中子どもと一緒に心のゆとりがない。子育て支援といわれると保育園等が優先され、一般的な意識もそちらを重視することが多く感じる。もっと、子どもと一日中一緒に保護者を支援する必要があると感じる。
21	コロナ禍以前も人のつながりが希薄になってきており、児童館で人と人をつなげることの重要性を感じ、そこに力を注いできた。現在、乳幼児の保護者が他の保護者との距離の取り方をどう保っているか分からず不安な方が増えたと感じる。実際に人とつながることで「困っているのは自分だけではない」「自分を支えてくれる人がいる」と安心できる。この人とつながりの部分では児童館が仲介することの重要性を感じる。また、最近の傾向として我が子とどう楽しく過ごすか、ではなくどこかに預けたいと思っている保護者が増えているように感じる。保護者の疲れを感じる。

3.2 小学生：他者と直接交流する遊びと自由時間の少なさ－孤立化を招く潜在的リスク

小学生をめぐるのは、直接的に孤立への言及はないが、特徴的なのが①放課後の忙しさと自由時間や遊びの少なさ(2,3,5,6,9,10,11,12,13,15,16,17,19)、②かまってくれない、承認体験の欠乏(1,9,18)③いらいらや不満などのストレスの抱え込み(8,10,15)、④メディア接触の多

さと集中力やコミュニケーション力の低下への危惧(7,10,13,18)などである。これらはそれ自体が孤立状態ではないが、将来的な孤立のリスクが色濃く内包されていることに注目する必要がある。

現状の小学生の放課後は自由時間がない一方で勉強と習い事に忙しく、自由に仲間をつくって遊んだり、自由な遊びの中でコミュニケーションスキルや社会性が養われる機会が減っていることが特徴として挙げられる。これは筆者が国からの委託調査で実施した板橋区在住の小中学生およそ 1,500 人に放課後の自由時間について調査した結果とも一致する(総務省行政評価局, 2021: 22-25)。とりわけ小学生(5年6年)は一日平均1時間程度であった。そうした多忙な日常のすき間を埋めるがごとく、SNS やインターネットゲームの発達によって、直接的なコミュニケーション機会も減り、スマートフォンやタブレット端末などの画面上での記号的なかかわりと間接的・脱身体的な経験が比重を増すという状況が見えてくる。それは十分に話を聞いてもらえる経験や手ごたえのある直接的な関わり合いからも遠ざかることであり、生身の人間同士の非言語も含めたコミュニケーションの機微に触れることから遠ざかることでもある。身体まるごとで遊ぶことができない欲求不満もあいまって、どこか「漠然とした不満やいらだち」「かまってほしい」という欲求と集中力の低下などにも表出していると見るのが妥当ではないだろうか。

このような子ども時代の不全感を抱えたまま、社会に出る20代半ば以降になって、いきなり自分の力で見知らぬ環境で他者との直接的な関係をつくり、新たなコミュニティで円滑にコミュニケーションができるだろうか。これから述べる中高校生以降、とりわけ20代・30代をめぐる回答内容を読み解いていくと、その後の成育過程にも影を落としていることが見えてくる。

表2 小中高生とのかかわりで感じると思うこと(小学生中心に抜粋)
回答者: 児童館職員(強調箇所は筆者による)

1	親とのかかわりが薄いのか、かまってほしい子どもが多いように感じる。
2	子どもたちは日々忙しく、習い事や塾の合間に児童館へ10分でも遊びに来るという子が多い。遊び中心ではない生活の中、遊びを求めていると感じる。
3	習い事や課題、部活など、日常的に忙しく過ごしている子どもが増えたように感じる。児童館は、発散できる場、友達と集える場としての来館も多い。
4	非正規雇用や、大人の孤立化、相対的貧困など多くの社会的課題による影響や大人のストレスの矛先が子どもへの関わりや環境へと負の影響を与えている。
5	自分が新人の時より、確実に子どもたちが忙しくなっていると感じる。習い事の合間を使って上手に遊んでいる。土日も用事があったり、高学年になると夜遅くまで塾の子など…。一人っ子の子どもが多くなったことと関係があるのか? また、習い事がすごく多い子と、全く何もやっていない子(やらせてもらえない?)で二極化しているようにも感じる。
6	放課後、休日のスケジュールの遊びがない。習い事の増加。体験活動、さまざまな子どもとの出会い、大人・他者との出会い。家でも学校でもない自由で楽な空間から人間性や社会性が作られる。
7	習い事を週に2個以上やっている子が多く、とにかく忙しい印象。体を動かして遊ぶ子もいるが、ニンテンドースイッチなどの携帯ゲーム機でずっと(放課後2~3時間)遊んでいる子も多い。体感として、話が聞けない、集中力が低

	下しているなどの悪影響も増えていると感じる。
8	学校や家庭で発散できない思いや、それらの環境とは違った一面を見せる子どもが多いように感じる。
9	「自分を見てほしい」「構ってほしい」という子が増えているように思う。
10	子どもたちはみな、毎日忙しく過ごしている。スマホやタブレットの使い方を大人より熟知しているが、学校等で正しいインターネット知識は身につけていない様子。いつ、だれがトラブルに巻き込まれても不思議ではない。
11	とにかく忙しい。暇を持て余す子の方が珍しい。小学生も受験を控えた高学年はもちろんのこと、低学年も習い事で毎日のように予定が決まっている。また、中高生も部活で時間がない。逆に、習い事や部活に専念しないと学校以外の所属が少ない。
12	最近の小学生はとても忙しいと感じる。自分が子どもの頃は「遊び」が中心で、その中で週に何日か習い事があった。でも今は逆に習い事が週の大変を占めており、合間をぬって「遊び」をしている（児童館に来ている）ことが多い。
13	習い事等のスケジュールに追われ、のんびり遊びを楽しむ時間が少ないと感じる。しなければならないことが多くある現状なのではないか。コミュニケーションをうまくとれない子も多い気がする。
14	小学生も中高生も、とても忙しい。忙しすぎる。時間のなかで、子どもの選択肢がどんどん狭まっている。やりたい！があっても選べない。じっくり遊びこむ時間、ホッとする時間を保障してあげたい。
15	子どもからストレスを感じます。何かむしゃくしゃしていたり、機嫌や言葉づかいが悪かったりなど。特に、小学生が表現するように思います。一方中高生以上になると、表に見せなくなるのかもしれない。
16	子どもの時間・空間・仲間のいわゆる「三間」が不足していて余裕のない子どもが多い。特に塾や習い事で時間がない、遊び場や居場所が少なく空間がないというのは顕著に感じる。
17	忙しい子どもたちが多い。居場所として求めて、イベント参加や手伝いを進んで参加する子どもと遊ぶスペースとして職員のかかわりやイベント参加をまったく必要としない子どもの二極化している。職員との関係が構築している場合でもそういった子どもがいる。自分にとって有益かをはっきりしてしまっているところを感じる。
18	スマートフォンの普及が人間関係にも影響していることが気になる。スマートフォンを使うことで目の前の人がいなくても成り立つ世界に身をおけるが、喜怒哀楽を人と共にすることで、心の成長を促したい。どこか寂しさのある「かまってちゃん」が増えている。承認欲求を満たしたい子どもたちが、様々な姿で主張したり、受け身の姿勢で発信をしていると感じている。
19	友達の輪を広げることができているのは一部の子。意見表明の場として毎月子ども会議を予定するが、意見を言いたいという子がない現状。思いはあっても、めんどくさいという様子。職員の力量が問われる。
20	時間に余裕がない、忙しい子どもが多い。児童館では、自分の好きなことを堪能し、自由に過ごせるようにしてほしい。

3.3 中高生：最も多忙で余暇の少ない年代—目標志向による他者との直接交流の限定化

ここまで小学生の日頃の様子や多忙な状況についてみてきたが、中高生になるとそれに輪をかけて多忙であることが、回答内容から読み取れる。青少年交流センターは主として中高生をメインターゲットとしているため、センター職員の7割以上から中高生の多忙さと余暇の少なさを指摘する声が寄せられた。主な特徴として①部活・塾・定期試験・受験勉強で追われている(1,4,7,8,9,10,14,15,19)、②目的利用が増え目標志向が強まり、幅のある交流が生まれにくい(17, 21)、③遊ぶこと余暇を楽しむこと自体に後ろめたさを感じられる(15)、④SNS利用が増え、インターネットゲーム利用の時間が長い傾向にある(2,19)、といった

ことが挙げられる。

多忙な日常を送る中高生は、学習・進学面で周囲からの期待も感じながら不安を抱えていたり(4)、「家庭や学校で満たされていない子どもが多い」といった指摘(20)からも、決してその多忙さは自ら進んでそうしているわけではない様子がうかがえる。自分の自由時間を持たないなかで、小さなことでも心からやってみたいことをやってみるという日々の経験が積めない状況は、「学校や家庭以外で活躍したり、頼られたりする機会が少ない」(5)といった指摘や、「やりたいことがない、発言の場や自分で物事を起こすのは苦手という若者が多い」といった指摘(12,16)にも表れているように思われる。これらは産業社会を中心とする大人社会の目的目標志向、効率志向の世界にとりあえず乗って行ける中高生と、それに乗り切れずにとまどい、後ろめたさを感じたり、劣等感や孤独感を感じている中高生との二極分化が進み始めているように読み取れる。小学生以上に自由な時間や余暇を通じた直接的な交流のゆとりを削られていくなかで、自らやりたいことをみつけたり、ひとや社会につながっていくことはできるのだろうか。このことは、次に見る20代・30代の若者の社会的孤立と生きづらさにおいて顕在化するように思われる。

表3 小中高生とのかかわりで感じること・思うこと(中高生中心に抜粋)
回答：青少年交流センター職員(強調箇所は筆者による)

1	小学生・中高生ともに自分のやりたいことをする時間が取れているか不安になることがある。 中高生に関しては、部活や勉強(塾)に時間を割いている中高生が多いように感じる。
2	中高生と話していると、SNSでの繋がりが増えているように感じます。大半はスマホを持っており、位置情報アプリを入れて友達の位置を確認している子が多く、今後トラブルが増えると感じました。
3	施設のハード面やプログラムの内容に魅力を感じて参加する利用者が多く、職員や他利用者とのつながりを求めて来館するのは、地域で孤立感を感じている高校生以上の利用者が多い印象を受ける。
4	学校のテストや課題、部活に塾、習い事など頑張らないといけないことがたくさんあると感じます。また、それぞれに周りからの期待や不安、悩みがあり、相談できる人や落ち着ける場所があればいいと思います。
5	中高生と関わり感じることは、認められたい・頼りにされたいと感じている人が多いのではないかと、また家庭環境や学校での立ち位置等が影響してそのように感じる人がでてくるのではないかと感じる。学校や家庭だけでなく活躍し、頼りにされるような環境も必要なのだと感じた。
6	高校生と話していた時、「学校外で同世代の友達が欲しい」という声を聞いたこともあり、需要があるのだろうと思う。
7	学校・部活・勉強・習い事などに追われ、忙しいように感じる。自分の余暇の時間があるかわからず、好きなことができているのか。
8	中学生は、放課後、自由に過ごす時間がほとんど無いように感じる。部活、塾、定期試験、高校受験に追われている印象。
9	勉強や部活、習い事などが多くやらないといけないことがある中で生活している。そのため青少年交流センターや児童館にいるときは少しでも自由に過ごしてもらいたい。
10	中高生になると、「習い事」「宿題」が増え、忙しそうにしている若者が多くいる印象。しかし、「習い事」や「部活」などの集団で社会に出る機会も増えるからか、精神面でも大きく成長する時期なのかなとも思う。成長するにつれて、「習い事」

	や「部活」以外で余暇を過ごせる場所が少なく、皆それぞれに模索しているのだなと感ずる。
11	学童期や青年期の発達課題で躓いている若者が時々いる。またはグレーゾーン(医療や福祉にかかるまでのレベルではないと周囲が判断しているかもしれない)の発達障害の可能性のある者、グレーゾーンで家庭に問題がある者もいる。
12	個人により違いはあるが、学校での活動が大半を占めているため、学校生活での話を聞くことが多い。その中で感ずるのは、学校内に存在しているある種の同調圧力であり、目立つことや失敗を恐れることで新しいことにチャレンジしづらいといった状況を感じる。
13	欠食の子や家庭の環境が気になる子がいる。学校などともっと連携して支援できると良いと思う。
14	中高生に関しては、部活動などで忙しくなり、小学生以上に隙間時間に利用している印象を受ける。
15	中高生は部活と勉強で本当に忙しいと思う。それ以外の自分の趣味を楽しむ時間さえなさそうだ。「勉強」に囚われていて、自由な時間がないと感ずる。反対に「勉強」をしない高校生は自己嫌悪を感じているのでは?と思われ、遊んでいる姿を見られるのを嫌そうにする時がある。
16	中高生世代：・仲間と悪ふざけしすぎたから、家庭や学校に不満がある、家族間に問題があるまで、家庭や学校では見せない、見せられない姿がある。なんらかの問題を抱え孤立感を感じる若者は1人で利用する傾向があると感ずる。慣れてくると利用者の少ない時間帯に訪れ、受付前に座り職員にずっと話しかけたり気を引く行動をとったりすることが多くある。 高校生世代と話す、進学については方向性以外にも、学力、資金などについて不安を聞くことがある。やりたいことを応援するといっても、現状に満足している、やりたいことがない、発言の場や自分で物事を起こすのは苦手という若者が多い。
17	中学・高校と進むにつれ来館目的が単なる遊び場から、勉強(学習室利用)、スポーツ(体育館・ホール)、音楽(スタジオ)などの利用目的が明確化され、互いが交わる機会が少ない気がする。
18	中高生の場合は、小学生ほど一人で来館しても気になりはしない(自習が目的であったり、小学校、中学校が同じだった子と会うためなどが目的としてあるため)。しかし、夜間まで残っている場合は家庭に居場所が無いという背景が感じ取られることがある。
19	全体的には「忙し過ぎる」のではと感ずる。特に中学生は学校・部活・勉強などで本当に忙しそうにしている。自分の時間が確保できているか心配になることもある。また、そうした中でもゲームやスマホを触っている時間がとても長いように感ずる。
20	中高生に関しては、家庭や学校で満たされていない子どもが多い。
21	〔中高学生〕 一般的な学生は部活や勉強に日々忙しくしている子が多く、センターの利用が通常利用から目的利用に変わってくる。以前はプログラムに積極的に参画できていた子も、なかなか参画できなくなってくる点が難しい。ただし、センター自体のことは好きでいてくれていて、継続的に利用し、職員や利用者との交流を楽しんでくれている点は素直に嬉しい。

3.4 19歳～39歳までの若者－際立つ20代半ばから30代の社会的孤立のリスクと生きづらさ

今回のアンケート調査で、19歳～39歳までの若者層が最も孤立化しやすいことを示唆する記述が多かった。青少年交流センター職員からの回答中21件、7割の職員がこの若者層に何らかの孤立状況を感じ取っており、つながりや友達づくりを求めてやってきていることに触れている(1,3,4,8,9,10,11)。とりわけ、大学や専門学校を卒業した後の、学校という所属を失った20代半ば以降の若者たちの生きづらさや孤立の問題が見えてくる。

小中高校や大学・専門学校までは、ほとんどの子ども・若者にとって学校という所属があり、さらにクラスや部活動、サークルといった大小さまざまなコミュニティに属しやすい環境がある。本人にとってそこを居場所と感ずるかは別として、学校に所属すること自体が社会的な承認となっている。ところが、「高校生までは居場所がある程度あると思うのですが、卒業して社会に出たらガクンと居場所がなくなる感じがしています。」といった回答にもあるように、高校を卒業した（中途退学も含む）途端に所属するコミュニティが少なくなり、雇用状況が不安定な中で、とりわけ非正規雇用の場合は、会社への帰属意識も得にくくなる。そのような環境下では、家以外に居場所となりうる場所も人とのつながりも得るのが困難になるのは想像に難くない。それは小中高生も同様で、「小学生も受験を控えた高学年はもちろんのこと、低学年も習い事で毎日のように予定が決まってる。また、中高生も部活で時間がない。逆に、習い事や部活に専念しないと学校以外の所属が少ない。」といった記述からも、子ども時代からの学校以外の居場所や帰属の場の脆弱さが隠れている。

こうした 20 代半ばから 30 代の若者層の社会的孤立リスクは、区が 2009 年と 2021 年に調査した区民の地域生活調査結果の比較からも数量的に表れている（金澤, 2023 : 12-14, 16-17）。例えば「道で会えばあいさつする相手の人数」で 0 人と回答した割合が 2% から 20.5% に急増し、年齢別でみたときに 30 代が 42.4% と顕著に高い。年代関係なく単身世帯は 45.2% と高く、30 代単身者の孤立化リスクが高いことが読み取れる。また町会・自治会、ボランティア活動、スポーツサークル、趣味・文化サークルの加入率をみても 30 代だけが一桁台となっており、2% から 8% 程度しかない。

3.2 でも述べたことだが、小さい頃から塾や習い事、試験勉強に追い立てられて、直接的に人と交流し、自由に遊ぶという経験が削られて育ってきた若者が、一気に自己選択・自己責任主義の強い現代社会の中で、自己決定力を発揮したり、積極的に他者とコミュニケーションをとって、関係をつくっていけるとは考えにくい。そのことは、つぎのような児童館や青少年交流センター職員の指摘からもうかがえる。

乳幼児期の愛着形成、その後の親子間での愛情の掛け違いなどを抱えたまま育った子は、就職へのモチベーションが低く、自分の生活やその豊かさを求めない傾向を感じる。仕事を探すという段階で大きなハードルとなる。また、就職してもすぐに離職することが多い。一方、学童期からでも丁寧に児童館や地域で見守られて育った子は、家庭の困窮具合によるところはあるが、自分を大切に生活基盤を作ろうという意識が育つケースも多くある。（児童館職員）

青少年交流センターの依存度が高い若者は、児童期または青年期の発達課題を引きずったまま、大人になっていると感ずることが多い。発達障害や病気で困っている若者も、この世代が一番多い気がする。すでにどこかの医療や福祉に通った結果、うまくい

なかなか若者も多いので、関わり方が難しいと感じる。(青少年交流センター職員)

小さな失敗をたくさん繰り返しながらゆっくり育ててほしいが、社会や大人(保護者)がその機会を奪って促成栽培をしている。そのまま思春期に突入するので大切なことを失敗から学ぶ機会が少ないと感じる。(児童館職員)

いずれも、乳幼児期から児童期を経て青年期、ポスト青年期へと移行するなかで、本来享受されるべき、経験や体験(十分な自由時間と遊びや余暇、多様な他者との直接的な関わり合いなど)が積めない、親・保護者も仕事で忙しかったり、あるいは孤立した子育ての疲れなどで十分なふれあいと愛着形成がなされないといった、ひとりひとりの成育歴とその背後にある社会環境全体の問題が横たわる。このように成育過程全体を見通してみてはじめて、若者の孤立や生きづらさの構造の一端が見えてくる。

表4 若者(19歳~39歳)とのかかわりで感じる事・思う事(抜粋)
回答者: 青少年交流センター職員(強調箇所は筆者による)

1	20歳代半ばから30代の若者で、友達づくりを目的に来館する方がいる。自宅やグループホーム、職場(作業所)での人間関係では満たすことの難しい、「つながり」を強く求めている様子が伺える。また、施設のメインの対象年齢を超えた後、地域に居場所がないことについての悩み・不安を吐露する若者もおり、若者の多様なニーズを満たせるような社会資源がまだ十分ではない。
2	20代半ばから39歳までの利用者は、何かしらの背景を感じる者が多い。就職の問題がついて回るなど、家庭が居場所となっていないケースが多い。
3	とくに20代後半から30代の若者は、居場所を探すことと同時に友達をつくりたいと明確な目的を持って来館するケースが多い。また、他関係機関から紹介されて来るケースも多い。さらに次のステップへ進む(とくに就労に向けた)ための充電期間、練習期間として過ごしている若者が多い。また、場所よりも人(ユースワーカー)に依存する傾向があるが、それぞれのタイミングで自然と離れていくように感じる。
4	やりたいことが見つからない、もしくは理想に固執してしまい他を見渡せずに悩む若者など、生きづらさを抱えた若者も多くいると感じる。常連として来る若者の大半は、「誰かと話したい」「友達を作りたい」と漏らすことが多い。この世代で外での所属先を持っていない若者は、経験の乏しさや、性格的な面も大きいかもしれないが、新しいグループや所属に自分からアプローチすることが難しいのかなと感じることがある。
5	中高生と比べて、自分自身を確立しており自由だと感じる。一方で自由になったからこそ進路や家族関係の事柄など自分で確立していかなければならないことに対して不安を抱えている方も一定数いると感じる。
6	目的意識を持たなくてはならないという前提にして、物事に取り組んでいるように思われる。それゆえに劣等感を感じて元気がなくなってしまう若者のつぶやきも度々聞き取る機会がある。
7	22歳以上の若者の利用は少ない。仕事で悩みを抱えていたり、地方から仕事で引っ越してきて、仕事以外の人間関係を持たない人も多くいると感じる。
8	個人で施設に来館する若者はほとんどの子が寂しさを抱えていると感じる。ご家族と一緒に居ると居心地が悪いのだろう。かといって他に会う友人もいなそう。学校や会社といった所属先がないと、人と会う機会が少なく、青少年交流センターに出会いを求めてやってくる。

9	「居場所」や「友達」を求めて来館する若者が小・中・高生年代と比べて多いような印象を受ける。また、職員を目的として来館する若者も他世代より多い印象。明確な目的をもって来館する若者が多い印象がある。
10	人との繋がりを求めていることが多い印象です。職員との会話が目的であったり、友達を作ることが目的であったりと、誰かに話を聴いてほしい、繋がりたいという欲求を持ちながらも難しいために、青少年交流センターにそういった点を求めて来館していると感じます。
11	話をしたい、話を聞いてほしいという利用者が多いように思う。話すと聞くのバランスができていない人と一方的に話してしまう人がいて、交友関係や就業経験にかなり影響していると感じる。
12	一般的には高校卒業しそれぞれの進路に向かうことで、より社会に繋がる年代だと感じる。抱えている課題もより細分化されるため、個人にあった支援が必要となるが、この年代では複数の課題が絡み合っているケースが多く、解決に時間を必要とする場合も少なくない。しかしながら解決能力も年齢と共に養われているので、対話の中で自己解決していく場面もみられる。差が顕著なのは就労に対する意識だが、支援を受けることが出来る年齢のうちに社会につなげ自立を促す必要があると感じる。

4. 青少年育成と若者支援に向けた児童館・青少年交流センターの取り組み

4.1 遊びと居場所、地域参加と多様なつながり創出の場としての児童館

子ども・若者の社会的孤立の防止、居場所とつながりの創出や地域・社会参加の観点から見ると、児童館はどのような場であるのか。そのことについて、児童館の存在意義についての回答内容を見ていくと、①子どもの自由な遊び場、②地域の居場所、③多様な他者や地域の大人とつながれ、交流できる場など9割以上の職員が人との交流やつながり、社会性に言及している。また、いつでも帰ってこられる場所、身近に相談できる場所、一人で来られる場所として、乳幼児親子や子ども・若者のセーフティネットでもあることが意識されている。

このように、児童館が自由に遊べる場所というだけではなく、乳幼児親子や子ども・若者の社会的孤立を防ぐ地域の要であること、0歳から18歳未満まで、彼ら彼女らの育ちの過程を切れ目なく見守ることができる貴重な場として意義を感じていることがわかる。

4.2 自分らしく居られる第3の居場所、広く地域・社会に参加・参画できる場としての青少年交流センター

一方、青少年交流センターの存在意義の回答内容を見ていくと、①家や学校・職場以外の第3の居場所として自分らしく居られる場、②気軽に息抜きに立ち寄れる場、③環境や心の変化の多い10代後半から20代の時期に安心してかかわれ、頼りにできる場、④地域や社会の橋渡しとして応援できる場として、9割以上の職員が安心して居られる場、社会とつながれる場として意識していることがわかる。これらは基本的に児童館と重なるところだが、環境と心の変化の著しい思春期年代以降の若者がメインとなるなかで、第3の居場所であること、安心であること、自分らしく居られることの重みは大きいように思われる。とりわけ若者の社会的孤立や生きづらさの視点から見た時には、以下の職員の指摘がセンターの存在意義を端的に示している。

広い間口を設けることで、様々な層の若者が利用できることは専門の支援機関につながる前の見えづらい課題を発見できる利点がある。日常のかかわりの中で、課題が大きくなる前の予防的な効果を発揮していると感じる。そこに繋がるまでには、若者に居場所として過ごしてもらう必要があり、年齢や成長の段階によるニーズをくみ取った施設づくりが重要だと考える。また、若者と地域や社会を繋ぐ橋渡しも、青少年交流センターという若者に特化した施設の役割だと感じる。若者が施設内だけのコミュニティに留まるのではなく、施設を通してより広い社会につながっていくことが長い目線での意義だと感じる。

また、若者支援においては地域・社会につながるということの内実も、遊びや余暇活動を通して交流することだけではなく、そこに参画していくことの要素も加わってくる。社会的な孤立を防ぐという予防的アプローチと併せて、同じ時代を生き、共に地域・社会をつくっていく仲間としての社会参画活動も各センターでは取り組んでおり、そうしたアプローチも若者支援の両輪として位置づいている。

5. 青少年育成・若者支援の意義と課題—子ども・若者の成育過程全体を通して継続的・安定的にかかわれる場の重要性

都市社会においては、施設や施策の機能分化が進み、年齢や属性ごとに分割され、別々の場において別々の支援が展開される傾向にある。このような支援の在り方はターゲットアプローチと呼ばれ、日本における青少年育成・若者支援施策は、近年この傾向が強い。その中であって、世田谷区の児童館や青少年交流センターは利用可能な対象者の幅が広く、職員側から見て継続的・安定的に見守ることができると同時に、利用する乳幼児親子や子ども・若者側から見ても、継続的・安定的に居ることができる安心と信頼の居場所として貴重であるといえる。これはユニバーサルアプローチと呼ばれ、成育の課題の有無に関係なく、あらゆる子ども・若者を対象とした敷居が低く間口を広くとったアプローチである。

また、地域の多様な大人とのつながりと交流もある児童館や青少年交流センターでは、乳幼児親子や子ども・若者だけではなく、多世代がつながりあえ、馴染みあえる場ともなっている。なかには児童館との出会いのなかで育ち、自ら児童館職員となるケースもあるなど、実際に世代間のつながりと継承・循環が生まれている。

このように児童館と青少年交流センターは、利用できる対象年齢の幅と、利用者の成育過程を見守れる時間の幅の広さを兼ね備えたユニバーサルな場である。その意味で、あらゆる乳幼児親子、子ども・若者の成育環境を支える重要な土台であることがわかる。だからこそ、都市社会のなかでの彼ら・彼女らへの理解者としても、両施設職員の存在は大きいといえる。

ただ、現状では30代の利用者割合が各センターで1%から4%程度にとどまっている¹¹⁾。

このこと自体が、30代の若者が社会的孤立の傾向にあることの裏返しとも見ることもできるが、そうした若者がアクセスしやすいよう、いかに工夫できるかが今後の課題となるだろう¹²⁾。

[注]

- 1) 一見「孤立」のように見えても、前提として場やコミュニティを共有しているなかで、あえて選択して一人である状況を、ここでは孤立とは呼ばない。例えば、知り合いや友人がいる場に一人で来て、あえて交わらず、一人であることを選択していることを、孤立ないし孤立化とは呼ばない。ただし、孤立それ自体を本人の自己選択、自己決定とみなすような自己責任主義の思考は、多くの人々を社会的な無関心へといざなう言説として注意が必要だと考える。
- 2) 是枝祐和監督の映画『誰も知らない』は、実際にあった事件を元に、育児放棄によって社会的孤立に陥った子どもたちの日常がリアルに描かれている。
- 3) このような事態の具体例として、都会をさまよう少女たちへのシェルター活動やサポート活動をしているNPO法人 bond Project の公式動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=wQVqB0Rvtrg>) で、ありありととらえられている。(動画は2023年12月14日閲覧)
- 4) ここでいう「支援」は単純に当事者への直接介入、直接支援という限定的な意味ではないこと断っておきたい。
- 5) ユースワーカーは比較的新しい青少年育成・若者支援にかかわる専門職の呼称である。もともとはイギリスやドイツなどの欧州では国家資格があり、日本でもその活動は「ユースワーク」として、1970年代に全国勤労青少年ホーム職員研修で紹介されていた。現在、立命館大学大学院でユースワーカー養成コースが設けられ、民間レベルでユースワーカー資格が出されている。
- 6) 詳細は厚生労働省のホームページを参照されたい。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/jinzaikaihatsu/saposute.html (2023年12月14日閲覧)
- 7) P-workの詳細は、各青少年交流センターのホームページに掲載されている。
<https://ups-s.com/program/index.html#program05> (2023年12月14日閲覧)
- 8) ここでの「専門性」とは医療モデルを範とするような科学的知識技術体系に基づく技術的専門性とは異なる。児童館や青少年交流センターのような、利用者の日常の一部として使われるような対人援助・支援施設では、感情と主観の交錯、他者との多様な関わりが展開する複雑性に満ちた環境で、その力量が問われている。そのなかで職員は、医療・科学モデルのような限定的で一方的な関係ではなく、子ども・若者と共に多様に織りなす関係世界を生きている。とりわけベテランスタッフ・職員は科学的な知識とも対話しつつも、日常の生活感覚に根ざした経験と感受性を磨き、全身をセンサーにして子ども・若者をとらえている。それは「生活モデルとしての専門性」と呼ぶべきものである。
- 9) 逆に、客観的な数値データを解釈する際においても、その解釈者の経験と省察に根差した鍛えられた主観によって読み取られなければ、表層の現実しかとらえることができない。
- 10) 今回は割愛したが、子育てをめぐる親・保護者の意識の多様化や父親の育児参加の状況など、直接孤立問題の記述ではないものの、子どもの成育環境をめぐる理解を深める記述が多く寄せられた。
- 11) データは、筆者が委員としてかかわる3センター合同運営委員会配布資料によるもの。
- 12) 今回のアンケート調査では、今後の青少年健全育成と子ども・若者支援の継続性や安定、充実に向け、多くの意見をお寄せいただいた。稿を改めて紹介したい。

[文献リスト]

金澤良太(2023)「社会調査データにみる世田谷区の地域コミュニティの変容－「地域コミュニティに関する調査」(21年調査)と「地域の生活課題と住民力に関する調査」(09年調査)から－」『せたがや自治政策』Vol.15

萩原建次郎(2004)「青少年支援者の力量形成と支援の在り方についての臨床研究」『駒澤大学教育学研究論集』

総務省行政評価局(2021)「子どもの居場所に関する調査報告書－子どもの視点から見た 公園の現状と今後に向けた提言－」

謝辞

本論文をまとめるにあたっては、せたがや自治政策研究所ならびに子ども若者部若者支援課、児童課の方々と、行事や事業の多い時期に時間を割いて回答いただいた児童館、青少年交流センターの職員の皆様の多大なご協力をいただきました。記して感謝を申し上げます。